

# すてっパジャーナル

## 特集 震災と女性

2008

Vol. 15

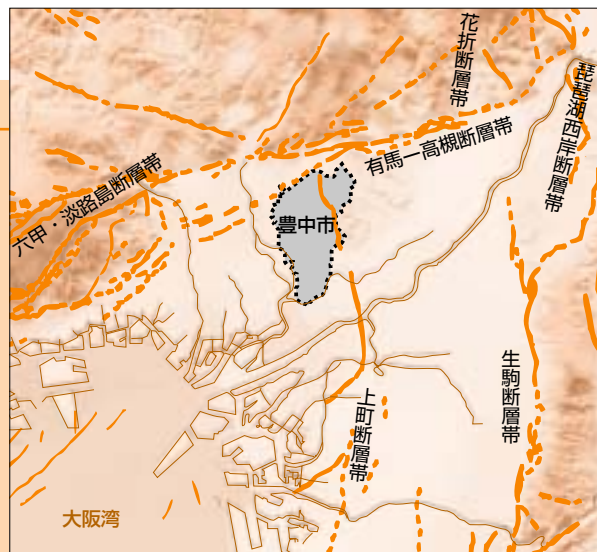
### 私の考えるジェンダー平等

#### 被災地における女と男

阪神・淡路大震災。被災地の中でも、激しい被害が出ていると報道されたところで友人が暮らしていた。消息を知りたかったが、電話連絡しようにも通じず、仕事に追われ訪ねていく余裕もなかった。友人が生きるとの消息を知ったのは、被災地で救援活動の中核メンバーとして活動している姿を伝える新聞報道だった。友人は救援活動で駆けつけたボランティアをどこに配置するかを割り振るコーディネートを担当していた。やっと電話が通じたとき、「生きています！」が友人の第一声だった。再会したのは震災から半年後だ。ずいぶん痩せた彼女の姿に、被災地での救援活動がいかに激務かを知った。

地元の公的機関も阪神・淡路大震災の被災者だった。「公的機関も被災者」というなかでは、公的機関に何もかも負担を強いるわけにはいかない。被災が甚大な部分に多くの力を注がねばならない。被災者の自助努力で乗り越えねばならない現実をしめしたのも阪神・淡路大震災だった。この体験から、友人は、いざというとき、公的機関に頼らず、市民が互いに生活や地域に密着した助け合いや支援をするネットワークの必要性を認識して、後日、住民サイドに軸足を置くNPO活動を始めた。

男たちは、居住地域で隣近所と太いパイプでつながりあえているのだろうか。私自身、生まれ育った地域に暮らしながらも、仕事に追われ、いつしか地域との関係はズタズタになっていた。阪神・淡路大震災の半年後。被災地の女性から「被災地に暮らす男たちは復興活動のなかで疲れきっているが、私たち女は元気よ」という話を聞いた。その違いは何だろうかと話して得た結論は「どんな環境になっても、おしゃべりを続けて、落ち込みがちな気持ちを発散させた女たちと、寡黙のまま復興に立ちあがった男たちの差だ」ということになった。一人ひとりのワークラ



— 活断層  
- - 推定される活断層



「地震がわかる！防災担当者参考用資料」（文部科学省）  
わが家の防災マップ（豊中市）をもとに作成

イフ・バランスが問われた。仕事優先を選ばざるを得なかった男たち。勤務先の近くのホテル住まいを余儀なくされたケースもある。一方、女たちは被災地のなかで生活維持を分担したことが多い。被災地の男たちが露呈したのは、生活力の無さと、地域とのつながりの希薄さだ。被災した夫婦の真価が問われた。綻びかけていた夫婦が力をあわせ難局を乗り越え絆を結びなおした。一方、厳しい環境のなかで互いのエゴがぶつかり破綻して震災離

婚をした夫婦もいた。被災した女性たちがその難局をどう乗り越えたのか。あるいは、途方に暮れたのか。

阪神・淡路大震災で被災した女性たちの体験をたどり、その教訓に学んで、女性にとって心強い支援のあり方を問うヒントを見つけ出したい。



とよなか男女共同参画推進センターすてっパ  
なかにあきら

館長 中村 彰